

美しい日本語とは

石川 洋子

一、はじめに

日本語は美しいものであり、その美しい日本語を話したり書いたりするためには、漢文の素養と古典の素養とが必要なのだと考へて、それを述べたことがある。⁽¹⁾ところで、その漢文と古典とをさらに分析すると、漢字で表すべき言葉と仮名で表すべき言葉に突き当たる。新田大作氏がそのことを次の如く指摘してをられる。⁽²⁾

現在われわれが使つてゐる言葉を文字に記す場合、われわれは漢字と仮名（片仮名と平仮名）とを使用する。これは日本語の中に、本来、漢字で表すべき言葉と、仮名で表わすべき言葉（漢字で表すことが出来ない言葉）との二種類のものがあるからである。このことは、言はれてみれば何でもないやうであるが、実はたいへん重要な内容

を持つてゐる。(中略)

結論から先に言へば、漢字を尊重しながら同時にその取扱ひを慎重にするといふこと、仮名で表すべき言葉の重要性を知り、これをゆるがせにしないといふこと、の二点である。

本論文は、日本語において漢字で表すべき言葉と仮名で表すべき言葉とについて考察し、美しい日本語とはいったいどのやうなものであらうかといふことを明らかにしようとするものである。

二、漢字で表すべき言葉

われわれは「読書」、「蛍雪」、「哲学」といふやうに、漢字で表されてゐる言葉を日常何気なく使用してゐる。これらの漢字の来歴をそれぞれ見てみると、「読書」は二字の語形の漢語である。これは漢字伝来のころは、おそらく「読ユ書シ(書を読む)」と訓読されてゐたであらう。「蛍雪」は中国の故事から出た言葉である。国語辞典(『現代国語例解辞典』小学館)には、「苦勞して學問をすること。苦学。『蛍雪の功を積む』▼ホタルを集めてその光で書を読み、雪の明かりで書を読んだという故事から。」とある。「哲学」は明治時代に西周が英語の「philosophy」に対して作った造語であることは有名な事実である。このやうに、漢字はその由緒来歴は相違するが、われわれは日常的に使用するものである。

ところで、故事から発生した「蛍雪」や西周の造語である「哲学」を、漢字でなく仮名で表さうとすると大変やっか

いになる。このやうな漢字は漢字で表すべきであらう。また、「読書」は「書を読む」と訓読することはできるが、現在の口語では「本を読む」と言ふ方がポピュラーであらう。しかも、「秋の読書週間」「読書にふける」などとよく使ふやうに、「読書」は音読みして、すでに熟語として市民権を得てゐる漢字の言葉であると言へる。このことに關しては、「三省」のところで後述する。

日本に漢字が伝來したのは、紀元一世紀までさかのばれるといはれてゐる。日本で作られた最古の文献で現存するのは、埼玉県行田市で発見された「稲荷山古墳出土鉄剣銘」であり、五世紀のものである。伝來から約二千年の時を経て、現在では漢字は日本語の一部となつた。明治期の造語群が現はれた時期から数へても百年以上が経つてゐる。しかし、清水幾太郎氏は著書『論文の書き方』⁽³⁾で、この漢字や明治期の造語群を使ふことができるやうになるためには、われわれには「経験の世界と抽象の世界を距てる大きな溝」があることを認識しなければならないとして、次のやうに述べてをられる。

(現在の問題は△石川注▽) 日常的な経験の言葉から学問の抽象的な言葉へ飛び移らねばならないところにある。民族の歴史が個人の歴史のうちに繰返えされているのである。どんな人間でも、自分がこの溝の前に立つ時、これを飛び越えねばならぬと知った時、当惑もするし、無力感も味わう。生まれて初めて何か抽象的な用語を喋る時、それを書く時、一種の恥ずかしさを感じる。此岸から彼岸へ飛び移る時、目をつぶって一思いに飛ぶ。それよりほかに仕方がない。しかし、飛ぶ時に、それが民族の運命であることを知っていなければいけないと思う。ひとりの人間が飛ばねばならないのは、民族の重たい過去を背負つたことだという事実、これを掴んでいなければいけ

ないと思う。

(一六四頁)

ところで、このやうな漢字はどのやうに日本語の一部となつて来たのであらうか。そこで、伝来された書物のなかでも、時代を通じて常に用ゐられてきた『論語』の中にある言葉から、その言葉の歴史を垣間見ようと思ふ。

その前に、『論語』から出た言葉で人口に膾炙した言葉を紹介しよう。現在では「学習院大学」や「三省堂」といふ固有名詞にもなつてゐる「学習」(学而第一・第一章)や「三省」(学而第一・第四章)、また、「温故知新」(為政第二・第十一章)、「文質彬彬」(雍也第六・第十八章)、「志学、而立、不惑、知命、耳順」(為政第二・第四章)などもあつた。また、若い人にはむずかしいかもしれないが、「朝に道を聞かば、夕べに死すとも可なり」(朝聞道、夕死可矣)、「里仁第四・第八章」、「一を聞いて十を知る」(聞一以知二)、「公冶長第五・第八章」、「三人行けば必ず我が師あり」(三人行、必有我師焉)、「述而第七・第二十一章」、「過ぎたるは猶及ばざるがごとし」(過猶不及)、「先進第十一・第十五章」、「己の欲せざる所、人に施す事なかれ」(己所不欲、勿施於人)、「顔淵第十二・第二章」などといふ格言もある。

右の中で、「三省」について、その訓読の変遷を見てみることにする。この「三省」の原漢文は「吾日三省吾身」である。これを二十二種類の『論語』の訓点本で調査したところ、ほとんどの資料が訓読みしてをり、音読みしてゐたのは二種類の資料だけであつた。次の通りである。括弧内は資料名である。

① 訓読み

a、「三タヒ……省ミル」と読む資料は、十一種類。(元応本、建武本、応永本、成實堂本、元龜本・左訓、惕斎

点、古義点、春台点、鈴木点、清家点、斯文会訓点)

b、「三ツ……省ミル」と読む資料は、九種類。(元龜本、文之点、石斎点、山崎嘉点、後藤点△二種類▽、一斎点△二種類▽、日尾点)

c、「三ツナカラ……省ミル」と読む資料は、二種類。(道春点、石斎点・左訓)

②音読み

d、「三省ス」と読む資料は、二種類。(山子点、冢田点)

右の結果から考へて、中世から江戸時代中期までの資料は訓読みであったのであるが、江戸時代後期に「三省ス」と音読みが始まって、それがだんだん明治期になって読み慣はされて二字熟語と意識されるやうになり、書店名にまで使用されるやうになるといふ変遷を経てゐると考へられる。前述の国語辞典で「さんせい(三省)」を引いてみると、「幾度も我が身をかえりみて戒めること。『再思三省する』」とある。

それに対して、同じ国語辞典で「おんこちしん(温故知新)」を引くと、その意味の解説のほかに補足として、「▼『故きを温ね、新しきを知る』とも読む。」と書いてある。参考までに述べると、この「温故知新」は、原漢文では「子曰、温故而知新、可以為師、」とあるところで、「温故知新」のまん中に「而」字が入ってゐるためか、前述の二十二種のすべての資料が訓読みしてゐる。二例からではあるが、二字あるいは四字の漢字が安定して熟語として用ゐられるやうになるには、個々の語の長い歴史があるといふことがわかるのである。

熟語になった漢字については、それを仮名で表すことはまったく困難であるとは言へないまでも、やはり説明が必要

になる。そこで、熟語は漢字で表すべき言葉ではないかと思ふ。そして、漢字で表すためにはその構造、その由来についてわれわれは知っておくべきであらう。つまり、「日没」の構造は主語と述語の関係であり、「読書」の構造は動詞の述語の下に目的語が結合してゐる関係であり、「白雲」の構造は形容詞が先に置かれてあとの名詞を修飾してゐる関係である。また、「蛇足」「推敲」「矛盾」「完璧」「背水の陣」等のいわゆる故事成語といはれる語の典故などを知り、その意味を知るべきである。漢訳仏教からの「開眼」「彼岸」「菩提」などといふ言葉も同様である。そこで、十分にその構造やその由来を注意深く学習し、「溝」を埋める必要があるのである。さうでなければ、漢字で表すべき言葉を理解せずに使用することになるからである。

三、仮名で表すべき言葉

「和語」は「やまとことば」とも言ふが、日本語本来の言葉である。それは「木(き)」「川(かは)」「聞(き)」「見(み)」などであり、日常生活で多く用ゐられ、日本語の基本的な語彙である。これらの基本語彙は漢字の訓読みに当てられてゐる。

それに対して、仮名で表すべき言葉といふよりも、漢字では表せない言葉は「てにをは」である。「てにをは」とは、助詞・助動詞・接尾語・用言の活用語尾のことである。この「てにをは」も、もちろん和語である。この「てにをは」なくして日本語とはならないし、通じないのである。つまり、文法機能の中枢はこの「てにをは」である和語が独占し

てゐるといへるのである。この役割は現代語においても一貫してゐる。これが漢文訓読においても、漢文を日本語として訓んでいく上でもっとも重要な役割を果たすのである。それは、この「てにをは」といふ言葉が、漢文訓読に使用されたヲコト点の図（博士家の第五群点）から出た言葉であるといふことが物語っているのである。

このやうな和語の異なり語数は、平安時代には和文で約九割、漢文訓読文で四割以下であつた。⁽⁵⁾よつて、平安時代の代表的和文の『古今和歌集』『土佐日記』『伊勢物語』『源氏物語』『枕草子』等は和語の宝庫であり、その用語・語法は後世の日本語の模範とされたのである。

さて、平安時代の文学の最高峰と言へば、やはり、『源氏物語』であらう。『源氏物語』を読めば、意味は分からなくとも、誰でも王朝の雅な連綿とした流麗な言葉の美しさに惹かれるであらう。

作家の白洲正子氏はアメリカのハートリッジ・スクールからの留学から帰国して、毎日自宅で先生について古典文学を勉強することになったといふことである。『源氏物語』を先生に習つてゐる、そのときの様子を『白洲正子自伝』⁽⁶⁾で、次のやうに描写してをられる。

この先生の特徴は、抜群に声のよいことで、

「いづれのおほん時にか、女御、更衣、あまたさぶらひ給ひける中に、……」

と、源氏物語を読まれると、うっとりとなる程だつた。時にはうっとりしすぎて居眠りをすることもあつたが、あの静かでまろやかな音声は、今も身近にひびいて来る。そのときもっと勉強しておけば古典文学者のはしくれぐらいにはなれたであらうに、そっちの方の考証には一向に興味がなく、ひたすら先生の言葉の美しさに魅せられて、

王朝の雅びの中にどっぷりつかること以外に私には能がなかった。

(一七三頁)

『源氏物語』は当時の話し言葉で書かれたといはれてゐる。それを、現代のわれわれは注釈書、あるいは先生なしでは解し得ないのである。それは何故であらうか。われわれの多くは宮中生活を知らないといふことも一つの理由であらう。しかし、和語の基礎語彙、文法機能の中枢は当時と同じであっても、言葉は生きてをり変化してゐるからといふことも一つの大きな理由であると思ふ。

たとへば、「あわれ(あはれ)」といふ言葉一つ取ってみても、意味が変化してゐる。現代語では「あわれな人」、「あわれな恰好」等と、気の毒な様子、みすばらしい様子ときに用ゐられるが、平安・鎌倉時代は「あはれなるもの。孝ある人の子。」(枕草子)、「もののあはれは秋こそまされ。」(徒然草)とあるやうに、心にしみじみとした、感嘆・喜び・愛情・悲しみ・同情等の感情を表すときに用ゐてゐたのである。

しかしながら、『源氏物語』は、白洲正子氏の言ふやうに「言葉の美しさに魅せられて、王朝の雅びの中にどっぷりつかること」ができるのである。しいて言へば、それが和語、和文の持つ働きなのであらう。

ここで、本論から外れるが、「現代仮名遣い」と「歴史的仮名遣」とについて少しく触れようと思ふ。古文を読むときは、変体仮名でも活字本でも、歴史的仮名遣ひでなくてはその雰囲気は味はへないであらう。古文でなくても現代語でも和歌・俳句などを作るときはそれが必要であらうと思ふ。仮名遣ひについて私の考へを結論から言へば、歴史的仮名遣ひの方が学問的に合理的であり、正しいものであると考へる。それでは、「現代仮名遣い」はどの点が不合理であるのであらうか。「現代仮名遣い」は現代語の発音通りに書くことを原則としてゐる。しかし、次のaからdまでの四

項目については、歴史的仮名遣ひに従って表記を決定してゐる。これらは「現代仮名遣い」の例外であり、不合理である。

a、助詞「は、へ、を」は発音通りに「わ、え、お」と書かない。

b、動詞「言う」は、原則からすると「ゆう(言)」と書くべきなのに、「いう(言)」と書く。

c、「四つがな(じ・ぢ・ず・づ)」の表記の基準が曖昧である。

d、オ段長音の表記は、同じ発音なのに二通りに分けてゐる。「おとうさん」のやうに「う」と書く場合と、歴史的仮名遣ひで「こほり」と「ほ」と書くものは「こおり」と「お」と書くとする場合である。

ところで、昭和六十一年七月一日に内閣告示で出された「現代仮名遣い」の「前書き」の第三項には、「この仮名遣いは、科学、技術、芸術その他の各種専門分野や個々人の表記にまで及ぼそうとするものではない。」とあり、「歴史的仮名遣」を認めてゐることを付け加へておく。

さて、少し脇道に逸れてしまったので、本論に戻すと、仮名で表すべき言葉、言ひ換へれば、漢字では表せない言葉は、助詞・助動詞・接尾語・用言の活用語尾のことである。これは、古来から文法機能の中枢を握つてゐて、現在でもそれを譲らないのである。たとへば、学生がゼミを選択するとき、「先生がいい」のか、「先生もいい」のか、「先生は(どうでも) いい」のか、「先生でもいい」のか、「先生だけいい」のか、「先生こそいい」のか、傍線部の助詞により、自分の意識を明瞭にする必要がある、かつ、先生に直接申し込む場合、先生に対しては、どの表現が適切か、十分な知識と注意を要するのである。また、漢字表記して訓読みしてゐる和語も用ゐる方は大切である。使用する場面により、

「確認する」と漢字の熟語で言ふか、「確かめる」と和語で言ふかも重要である。更にこれをわかりやすい言葉で言ふと、「愛してるよ」と漢語サ変動詞で言ふか、「好きだよ」と和語で言ふか、「お慕ひ申し上げてをります」と高度な部類の和語で言ふかによって、相手に与へるその人の印象は大きく変はるのである。

四、漢字と仮名とのバランス

「中庸」という言葉がある。人間にとって「中庸」は最も大切であるが、それを実行するのは難しい。どちらにも偏らないでほどよくするのは、微妙なバランス感覚の上に立ってゐるからである。しかもそれが正しいバランスでなければならぬのである。言葉を用ゐるときでも同じことが言へると思ふ。つまり、漢字で表すべき言葉と仮名で表すべき言葉とのバランスが大切であるといふことである。美しい日本語とは、漢字で表すべき言葉と仮名で表すべき言葉を正しく使用した上での、両者のバランスなのであると思ふ。

ところで、現代の口語体は明治以後に作られたものであり、「普通文」に始まると言はれてゐるが、それを更に遡れば、現代語の源流、祖であるとも言へる「和漢混淆体」といふ文体に至る。この文体は「多く鎌倉時代以降の軍記物にみられ、和文体を基調に漢文訓読調が交ざったもので、和文のみやびと漢文のリズミカルな簡潔さの双方の良さが生かされる」ものである。ここで指摘された「和文体」、「漢文訓読調」、言ひ換へれば、和文的文脈と漢文的文脈であるが、これは現代の日本語にも依然として受け継がれてゐるのである。

新田大作氏は、和文的文脈と漢文的文脈が現代の日本語にも依然として受け継がれてゐることを指摘し、そのバランス感覚を養ふには古典と漢文を学ぶことであると、次のやうに指摘されてゐる。⁽⁸⁾

和文脈の話し言葉の伝統が、現代のわれわれの日常のことばの使い方の中に生きていると言えるのだ。ということばは、国文古典を通じて、われわれのことばの使い方を学ぶことができるということである。(中略) 言葉遣いが間違っている、乱れていると言われる場合、その判断の基準として、われわれは無意識のうちにこの古典のことばの感覚を前提としているのではないだろうか。言葉の感覚を磨くということも、古典の鏡に己のことばを発見してゆくことに外なるまい。美しい正しいことばの使い方については、現代においてもなお古典に学ぶところが極めて多いのである。

国文古典が主として言語表現において現代に極めて多くの比重を持っているのに対して漢文古典は文章表現において、これまた現代のわれわれに大きな示唆を与えるものではなからうか。わが国の文章家といわれる人々は殆どと言つてもよいくらいに、漢文古典の文章を読みまた学んでいる。⁽⁹⁾ (六十八頁)

ただ、「学べ」と言ふだけでは無責任であるので、漢文を学ぶ、いわゆる「マニユアル」を次に紹介する。長谷川弥人氏が、日本漢方医学を志す人のために書かれた「古医書読解のための漢文速成講座(1)」による。⁽⁹⁾

前半(人口に膾炙した中国の名文△石川注▽) ははじめに一通り読んで、漢文の内容を理解する。次に訓読を三〇四回声を出して読み、漢文の句調リズムを耳眼口にて体得する。次に漢文を手自ら原稿用紙に写す。以上を二〇三回ないし数回繰り返し、本文を見ずに、訓読を見ながら漢文を誤りなく書けるようにする。一応可能となった方も

一〇二週後に再び挑戦して確実にする。

後半（本邦医家の文△石川注▽）は読解できれば可とする。初心者には訓読を見ながら読み、文章になれる。

語句法は将来漢文を読むときの基礎知識となるので、記憶にとどめておくべきである。

この後、「附記」として、次のやうにある。

この上達法は全く迂遠で、前世紀的と非難されるであろう。昔、頼山陽が『日本外史』を執筆するとき、毎朝予め『史記』を読んで、格調高きを期したという。また作家を志す人は、文豪の文を毎日原稿用紙四〇五枚手写し続けること三〇四ヶ月とと教えられたという。敢えて言う、実行せずにその効果を批判してはいけないう。

このやうな訓練が行はれないと、「弊害（弊害）」「変しい（恋しい）」「災いの女（炎の女）」などといふ簡単な漢字でさへ、誤字を書いても気が付かなくなってしまうのである。また、古典も勉強を怠ると、ワープロを使用したりして卒業論文を書いた場合、「とうり」「きずく」「つづく」などが、「通り」「気付く」「続く」と漢字に変換できず、それこそ誤った「現代仮名遣い」で、そのまま平仮名でうっかり提出などとなってしまふのである。

五、終はりに

美しい日本語とは、漢字で表すべき言葉と仮名で表すべき言葉とを正しく使用した日本語である、と私は思ふ。日本に生まれて日本で育てば、日本語を読み、書き、話せるのは当たり前である。しかし、ただ日本に生まれ育っただけで

は、美しい日本語は話せないし、まして書くことはできない。美しいものを美しいと感じ、正しいものを正しいと認識する感覚を養ふことが、美しい日本語を話し、美しい日本語を書くために必要である。具体的には、漢文・古文を学ぶことである。その結果、われわれは現在用ゐるべき漢字と仮名のバランスを感覚を養ひ、自分が使用する言葉の選択に生かしてゆけるのである。

注

- (1) 石川洋子「漢文訓読の価値について」(『国語国字』第一四四号) 平成元年三月
- (2) 新田大作「日本語の中の漢字のことば」(『国語国字』第一〇六号) 昭和五十年十二月
- (3) 昭和三十四年三月 岩波新書
- (4) これに関しては第七十四回訓点語学会で発表した資料をもととした。別稿を準備中である。
- (5) 築島裕「国語の語彙の歴史」(国語教育のための国語講座4『語彙の理論と教育』) 昭和三十三年四月 朝倉書店
- (6) 一九九四年十二月 新潮社
- (7) 「文体」(山口明穂解説)(『電子ブックTM版』日本大百科全書) 小学館
- (8) 新田大作「古典教育と漢文 国語古典シリーズ(5)」(『国文学 言語と文芸5』) 昭和三十八年五月 大修館
- (9) 長谷川弥人「古医書読解のための漢文速成講座(1)」(『漢方の臨床』四十一巻七号) 平成七年七月

〔附記〕

この論文は、平成七年十一月十一日、同朋学会学術大会において行なった研究発表をもとに、補訂を加えてまとめたものです。
(平成十年一月八日、記)

美しい日本語とは